ユニバーサルデザインの家庭科

小学校通常学級の学級担任と特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが一緒に「家庭科の授業」をつくる取り組み

池尻加奈子

Ⅰ　はじめに

東京学芸大学とみずほフィナンシャルグループは金融教育の共同研究を行ってきた。本稿では、「家庭科」における授業実践について報告する。

東京都はすべての学校における特別支援教育の推進をめざしている。幼児・児童・生徒一人一人のニーズに応じて適切な指導と必要な支援を行うことができるよう、関係者及び関係機関のより一層の連携強化に努めるため、個別の教育支援計画の作成と活用による一貫性のある支援の充実や、特別支援学校のセンター的機能を活用した地域支援の充実など、障害のある幼児・児童・生徒一人一人に関わる人々や学校、関係機関のつながりを大切にした特別支援教育を推進する取り組みを行っている。(東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画－すべての学校における特別支援教育の推進を目指して－概要　より一部抜粋)

本校相談部は、特別支援学校のセンター的機能として、定めた支援地域内の保育園や小・中学校の巡回相談を行っている。園・学校の依頼を受け、観察や校内委員会の参加を通して、支援方法等の相談・助言を行っている。本実践は、巡回相談を通して、通常学級担任に直接的に働きかけ、普通教育と特別支援教育それぞれの視点を合わせたユニバーサルデザインの授業づくりに取り組み、通常の学級における特別支援教育を推進させることを目的とした。

授業は、小学校 5 年生の家庭科で行うこととした。2008 年に本校が開発した特別支援学校向けテキスト「くらしとお金」を中心的に用い、これまで開発してきた金融用語集「私たちのくらしとお金」、2012 年の新テキスト「考えてみようこれからのくらしとお金」および授業支援用 DVD を活用し、その効果を検証することにした。

Ⅱ　授業実践の概要

1．単元について

児童自身が生活をつくりだしていくことを自覚し、主体的に判断し責任をもって行動できるようになることをねらいとし、小学生の発達段階においても、健全な金銭感覚を養うとともに、物や金銭の計画的な使い方と適切な買い物に関する基礎的・基本的な技能や知識を身に付けさせたいと考えた。

そこで、特別支援学校向けテキスト「くらしとお金」のＰ22，23 を導入として用いることとした。テキストでは「お金の貯め方」として、海外旅行を取り上げている。５年生は社会科で世界の主な国々について学習しているので、無理なく本単元の学習に導入できると考えた。

本単元の主となる活動として、ゲストティーチャーの講話を設定した。みずほフィナンシャルグループの職員に直接お金や銀行について質問することを通して、関心、意欲を高め、学びを深めたいと考えた。また、家族に買い物に関するインタビューをする課題を与え、家庭と連携した学習を展開し、自分自身や友だちのくらしを見つめさせたいと考えた。「考えてみようこ

れからのくらしとお金」テキストのＰ31、72を参考にしながら、「ものを大切にする」ことをキーワードとし、環境にも視点をむけられるよう「フード・マイレージ」について取り扱うことにした。本単元を通して、生活の主体者となることを目指し、正しく選択できる消費者の視点を育てたいと考えた。

２．対象校の児童の実態（A小学校５年生　男子17人　女子20人　計37人）

本実践の対象校は、市内で特別支援教育・教育相談のシステムを構築しているＡ小学校とした。年間 11 回の巡回相談日が設けられており、１回に２学年ずつの児童を対象にして実施している。事前に担任が用意した相談したいことのポイント、個別指導計画、チェックリスト、座席表等の資料をもとに午前中は行動観察を行い、午後から担任、コーディネーター、養護教諭等とケース会議を行っている。その後校内委員会を開催し、校長、副校長、スクールカウンセラー、生活指導主任等と情報を共有している。

対象学級の児童は、5 年生になり、新しく家庭科の学習が始まり、どの児童も関心を持って新しい学習に取り組んでいる。学力面では、基礎的な学力が身についている児童とそうでない児童との二極化が著しく進行している。現在も情緒障害通級指導教室に通っていたり、これまで通っていたりした児童が 5 名在籍する他、集中することが難しい児童が多く、5 年生相応の学習態度を身に着けられていない児童もいる。全体として、素直で、活発に発言、意見交換ができる一方、書いて表現することが苦手で、考えを言語化し、記述しながら整理することに慣れておらず、手がかり（声かけ、視覚的な資料）を与えないと記述が進まない。

学習前にアンケート（表１、図１）を行ったが、「お金に関する行動」によると、「だいたい決まった日におこづかいをもらっている」児童は 4 割であった。購買行動の経験だが、7 割弱が文房具やお菓子等の小さな買い物を一人で行っている。洋服等の大きな買い物については、2 割程度一人で行った経験があると答えている。

貯蓄に関しての質問では、「お金をためている」と回答する児童が 9 割存在した。そのうち、「郵便局や銀行にお金を預けている」児童は、7 割である一方、「おこづかい帳をつけている」児童は、3 割に満たなかった。普段から自分で判断して買い物をしている児童が、お金を計画的に扱えているかどうかが疑問に感じられた。お金を「貯めている」と回答している児童は多いのだが、実際、どのようにすればお金を大切に扱えるのか、また計画的にお金を使うことができるか知識を持っていないことが予想された。

表１：アンケート（問１）

問1の1	だいたい決まった日におこづかいをもらっていますか。
問1の2	お金を貯めていますか。
問1の3	銀行や郵便局に自分のお金をあずけていますか。
問1の4	おこづかい帳をつけていますか。
問1の5	文房具など学校で使うものを一人で買いに行くことはありますか。
問1の6	お菓子やジュースを一人で買いに行くことはありますか。
問1の7	洋服や自分の欲しいものを一人で買いに行くことはありますか。
問1の8	お金(使い方や貯め方など)について、家の人から教わったことはありますか。
問1の9	お金(使い方や貯め方)について、学校の先生から教わったことはありますか。

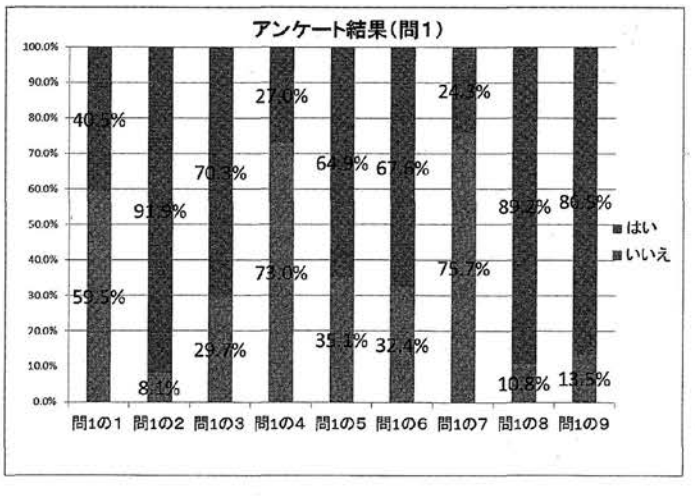

図１：対象児童のアンケート結果

３．単元展開の概要

学習指導計画（全３時間）		ねらい
第１次	お金とくらし「海外旅行にいってみたい？」	たくさんのお金が必要なときどうしたら良いか考え、お金や銀行に興味をもつ。
第２次	銀行とくらし「みずほ FG の職員さんに聞いてみよう！」	お金と銀行の仕組みや働きを知り、上手に活用していこうとする気もちをもつ。
第３次	買い物とくらし「やりくり上手になるには？」	物や金銭を計画的に使うことの重要性を知り、物や金銭を大切にして適切に買い物をしようとする気もちをもつ。

Ⅲ　授業実践の課題と展望

１　授業実践の成果と課題

花熊（2011）は以下の４点をユニバーサルデザインの授業づくりのポイントとしているが、これらに基づき、本実践を振り返ることにする。

①子どもたちが学びやすいように教室環境や学習環境を整備する
②学習や行動のルールを明示し、子どもたちが落ち着いて学習でき、安心して過ごせる学級を作る
③視覚的手がかりの使用や教師の指示・説明を分かりやすくすることを通じて、子どもたち学習の見通しを立てやすい授業を行う
④子ども一人ひとりの特性や学習速度に対応するために複数の学習方法や教材、支援グッズを用意する

①については、学習に関係のない掲示物を後方に移して黒板の周りの掲示物を必要最低限にし、不要な刺激を排除した。また教師用事務机を教室後方に置くなど、授業中視界に入る教室前方の整理整頓を心がけた。（図２）

②については、学習や行動のルールを黒板周りに掲示した。（図３）日常的にそれらを活用し、折に触れて評価や指導を重ねてきた。また机間巡視を支援の必要な児童に対して意図的に行い、個別に声をかけることを行った。発問は細分化して、発言の機会を増やすと共に様々な難易度のものを用意し、なるべく多くの児童が発言できるように工夫した。発言を板書する際は、名札カードを用いて発言者を明確にすることで全員参加を促した。（図４）

③については、まず授業初めに学習課題を時系列で示し、授業中も時々授業の進捗状況を確認しながら進めることで、児童が見通しをもって学習に取り組めるようにした。（図５）それらの提示には電子黒板を活用した。電子黒板では、その他に学習課題や資料などを分かりやすく提示した。児童が記入するワークシートは、スライドとフォントや画像をそろえるなど関係付けて提示し、児童が迷わずに学習に取り組めるようにした。授業の終わりには、必ず次の時間の予告をし、単元を通して児童が見通しをもって取り組めるようにした。

④については、できる限り具体物を示し、見たり、触れたりするようにした（旅行パンフレット、お金、食品パッケージ、洗剤の詰め替え容器等）。旅行パンフレットは、そのまま使用せず、授業のカギとなる値段のみを強調するようにした。パンフレットの情報はできる限り生かし、関心のある児童が読み深められるようにした。食べ物や乗り物など児童の興味が強そうな

写真や絵を別ページから切り貼りして加工した。カラーユニバーサルデザインの考え方を参考にした配色を心がけた。ワークシートは、記述するだけでなく、選択式の項目も用意し、文字を書くことや自分の意見をまとめあげて書くことに苦手のある児童が取り組みやすいようにした。また、教師が成果物の確認を短時間で行えるように、授業感想を記述させるだけでなく「今の気もちは？」と表情イラストから選択、○をつけるようにした。（図６）

本実践では、ワークシート等の成果物を分析することで、児童の学びの到達度を確認した。授業内容を理解しているかどうかといった習得度を確認できるだけでなく、書いている文字が乱れていないか、誤字脱字がないか、落書きはないか、破られていないか、提出物がだせているか、といったような基本的な授業態度や生活態度の変化を読み取ることができた。

以上のようにユニバーサルデザインのポイントを用いて授業をつくったが、日々の学級経営で、授業に向かわせる気持ちを作っていた。4月当初の学級は、時間を守る、話を聞く、準備、片付け、提出物を確実にする、人の嫌がることをしない、ノートは言われなくても書く、教室移動は並んで静かにする等の学校生活における「当たり前」のことが自主的にできていなかった。なぜそうしなければいけないのか、理由をきちんと考えさせ、丁寧に説明することを繰り返し行ってきた。また、毎日のルーティンである係や当番のシステム作りなどを通じて自治力を育てることをしてきた。

石隈（2013）は、通常学級におけるユニバーサルデザインの考え方として、教科教育・特別支援教育・学級経営の知見の重なりが求められると述べているが、本実践では、学級経営で学級全体をコントロールすることと、特別支援教育の視点で一人ひとりの実態を丁寧に見ていくことのバランスをとることができた。教科教育という点では、家庭科という教科は、毎日の生活と密着しており、読み書きを必要とする座学だけでなく、実習も多いことから特別な支援を必要とする児童にとって、取り組みやすい教科である。本単元では、「お金と買い物とくらし」ということでゲストティーチャーの講義というイベントを入れたり、身近にある食品を取り上げたりすることで、興味関心をひきつけた。第３次のワークシートの記述を見ると、最終回で困った顔、わからなかった顔を選択していた児童は誰ひとりいなかった。本単元の授業を受けて、「わかった！」と気分が良くなったことは特別な支援が必要な児童だけでなく、誰もが安心でき、学習に対してポジティブな気持ちになれ、学校生活をよりよくすることにつながるだろう。よって本実践では、多様な子どものニーズの「基礎的なところ」に応えることができ、すべての子どもの参加を可能にし、子どもの学習観をポジティブにできたのではないかと考える。

今回、巡回相談の中で、通常学級担任と一緒に授業づくりに取り組んだが、定期的に特別支援学校のコーディネーターが授業観察をし、学級の雰囲気や教師と児童の関係を客観的に見ること、必要に応じて児童に対し直接的に支援をすることで、多くの側面から児童の実態をとらえることが可能となった。担任とコーディネーターが情報交換をすることで、特別支援の必要な児童に対する個別的な対応方法を知るだけでなく、担任がしていた授業中の発問や声かけなど無意識に行っていた支援が的確であったかどうか、再確認することができた。

本実践を通して、特別支援教育が「特別な手立てをするもの」という意識を持っていた通常学級担任の意識を改革することができた。「何をしたらいいのかわからない」と言っていた担任も、これまでやってきたことが適切な支援であったことを知り、またちょっとした工夫をすることによってより支援が深まることを体感したことにより、特別支援教育を身近に感じ、興味関心を持つようになった。このように、特別支援教育について自信を持ち、リーダー的な役割

を担える教員を育てていくことができたのが、本実践の成果である。

（２）教材の有効性と新たな授業づくりの可能性

本実践において、特別支援教育のテキストの一部分を導入として小学生に用いることを試みた。特別支援教育のテキストは、イラストがわかりやすく、非常に使いやすかった。新テキスト「考えてみよう　これからのくらしとお金」は、添付の授業支援 DVD に WEB テキストが収録されていたため、スライドやワークシートの作成に活用できた。

ただ、特別支援教育テキストを小学生に用いるのは、なかなか難しいものであった。トップダウン式で作られているため、学習の到達点が一つに絞られておりわかりやすいのだが、言葉（用語）や状況を伝え、知識を増やすことが学習の中心となっているため、本実践では説明型の授業となってしまった。海外旅行から、フード・マイレージにつなげる展開をとって、既習の知識を生かして考える課題解決型の学習を行うことを目指したが、全３回の授業では、児童の考えを深める時間を取りきれなかった。

また、本実践では、海外旅行を導入に、たくさんのお金が必要なときどうしたらよいか考えることにしたが、海外旅行の金額が小学生にはつかみにくいものであった。特別支援学校高等部の生徒は、作業学習において生産・販売活動を行うこと、現場実習を経験すること、特別支援学校におけるキャリア教育を通して、金銭感覚や賃金への意識を身につけていくため、旅行にお金がかかることや実際の金額のイメージを持つことができる。一方、対象児童はアンケートによると約３割が一人で買い物に行ったことがなかった。そのため、ハワイ旅行が 16 万円という金額を安いととらえる児童も多くいた。児童の実態から第２次以降の授業の中で、厚生労働統計の初任給比較のデータに触れ、テキストの給料の使い道のイラストと合わせて金銭感覚を調整することを行ったが、購買行動等の経験値を考慮して、授業を構成できるとよかった。今後、対象を限定せず使えるようなテキストに改良できるとよいだろう。

Ⅳ　参考、引用文献

１）東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画－すべての学校における特別支援教育の推進を目指して－（概要）（2010）

２）石隈利紀（2013）通常学級におけるユニバーサルデザインの教育と課題と展望．日本特殊教育学会第５１回大会

３）くらしとお金　お金はゆたかなくらしのパートナー　くらしのテキスト特別支援教育編

４）考えてみよう　これからのくらしとお金

５）小・中学生用　わたしたちのくらしとお金　用語集

６）花熊曉（2011）学校全体で取り組む授業ユニバーサルデザイン．特別支援教育研究,652,7－13

７）金融教育共同研究プロジェクト報告書（2013）子どもの意識をふまえた金融教育の展開

【謝辞】本研究に本研究にご協力いただいた小学校のみなさん、一緒に授業をつくってくださった三浦尚介教諭、ご指導くださった東京学芸大学生活科学講座藤田智子先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

図２：すっきりとした教室前方と
教師の事務机がある後方

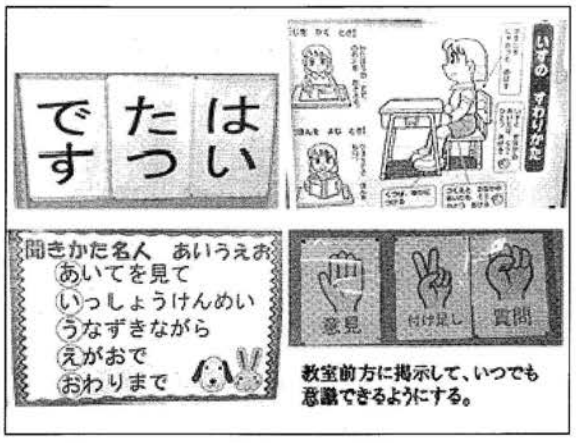

図３：学習ルールの掲示

この部分は

公開に適さないため

掲載できません。

第3次 買い物とくらし「やりくり上手になるには？」

家庭でしている買い物の工夫について班でまとめ、発表した。消費期限と賞味期限の意味を知り、賞味期限の長い物、短い物どちらを買うか、意見交換した。

図４：名札カードを使った板書

5年 家庭科

考えよう お金と買い物とくらし
3時間目

(1) 前回のふり返りコーナー

(2) 買い物の工夫を教え合おう

(3) 物や資源、お金を大切にしよう

(4) まとめ

図５：スケジュール提示をするスライド

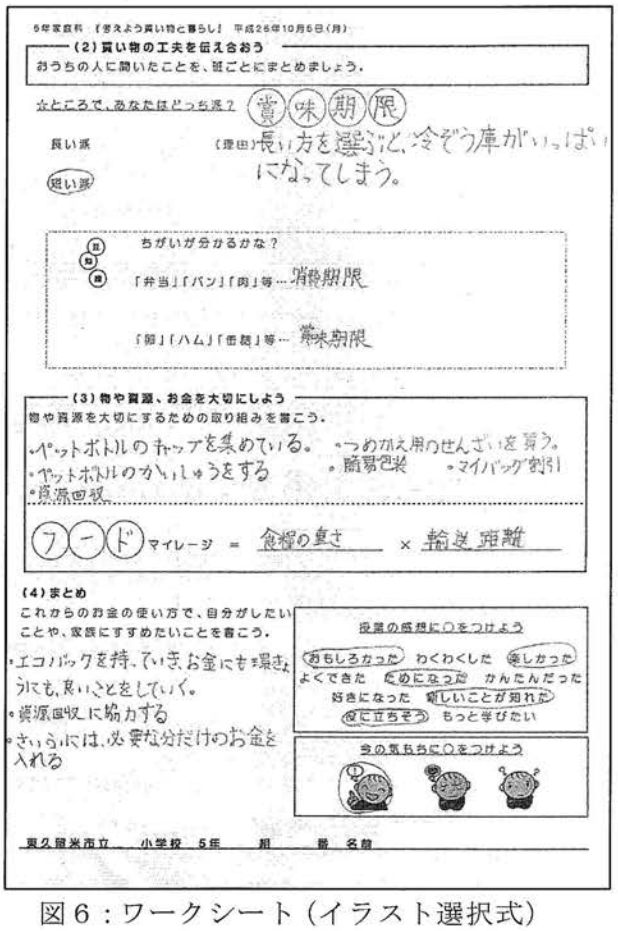

図６：ワークシート（イラスト選択式）